チュプキサロン 記録

Vol.4

2023 年 9 月 6 日(水) 14:00-16:00 @シネマ・チュプキ・タバタ シアター　参加者：6 名

テーマ　みんなが楽しく安心して住めるまちを
映画館から考える

参加者へのメッセージ

“ 前回のサロンでは、ゲストの今井健太さんに、ミニシアターの設立についてさまざまな構想をうかがいました。その中で、「映画館を作りたいというよりも、まちづくりの視点で考えた結果が映画館だった」というお話がありました。今回は、この点をクローズアップし、さまざまな形で映画や映画館にかかわっているみなさんと、「みんなが楽しく安心して住めるまち」を映画館から考えてみたいと思います。

わたしたちのまちに映画館があることは、社会にどんな影響をもたらすでしょうか。映画館がまちの中でどんな役割を担っているのか、どんな可能性を秘めている場所なのか、事例やアイディアをみなさんに持ち寄り、語り合いましょう。

映画は時代を映し出す鏡であり、次世代に繋ぐバトンでもあると思います。それぞれのまちで起きた事例やニーズから、新しい可能性が見えてくるかもしれません。”

第 4 回のサロンでは、映画館とまち（およびそこに暮らす人）との関係を深掘りしました。

プレゼンターは立てず、冒頭から参加者にマイクを回す形でテーマについて対話を展開しました。参加者として、レギュラーメンバーのほか、沖縄でミニシアター「シアタードーナツ」を経営する宮島真一さんと、バリアフリー字幕や音声ガイドのアプリ「UDCast（ユーディーキャスト）」を提供しているパラブラ株式会社の蒔苗（まかなえ）みほ子さんをご招待しました。

今回のアイスブレイクのお題は、「最近観た映画」。場が温まったところで、ファシリテーターの石井から、「どんなまちなら安心して楽しく暮らせるか」や「どんな映画館がまちにあったらいいか」の問いかけがあり、それに映画館の利用者や生活者の立場から参加者が応答。次第に、映画館ならではの鑑賞体験、ミニシアターとシネコン各々の特徴、既存の環境設定から”こぼれる人”のニーズ、鑑賞マナー喚起のあり方などについて、映画館の現場や、さまざまな課題や困難を抱える当事者から見える風景も聞きながら、対話が深まっていきました。

映画館と人とまちと社会とがどのようにつながっているか、映画館という施設がどのような役割や使命を負っているのかをあらためて考える回となりました。

このレポートではその様子を抜粋、編集してお伝えします。　（構成・文：舟之川）

プロジェクト運営メンバー　平塚千穂子（シネマ・チュプキ・タバタ代表）/ 石井健介（ブラインド・コミュニケーター）
舟之川聖子（コーディネーター）/ 吉川真以（コーディネーター）

TURN LAND プログラム　主催：東京都，公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京，一般社団法人 谷中のおかって

コミュニケーション、つながり、歴史

石井：今日はまずこの質問ではじめましょう。みなさんにとって楽しく安心して暮らせるまちってどんなまちですか？

参加者 a：パッと思いついたのは商店街です。小さい頃、地元にあった商店街は、今はほとんどなくなってしまいました。商店街って、ふらっと入って、なんとなくお話ができるんですよね。コミュニケーションの場として、商店街があるまちに住みたいです。

参加者 b：生まれ育ったのが横浜の新興住宅地で、まちができたときに家族で引っ越してそこで育ちました。歴史がないまちだったというのもあって、あまり愛着はなかった。お店も近くになかったし。大人になって東京や埼玉で一人暮らしを始めて、やっぱり歴史があるまちのほうが心地よいなぁと思いました。

参加者 c：お祭りがあるまち。コロナ禍でお祭りがないときに引っ越してきたので、まちの人のことをよく知らない。公園に行っても、知ってる人がいて、こんにちはと言えると安心になる。今年はお祭りがあるらしいので、参加してみようと思います。

参加者 d：自分の生まれ育ったところは島なので、東京ではやっぱり空が広いところ、ホッと身を置ける場所があるといいなと思っています。ふらっと一人で飲みに行けるようなお店があるのも住みたいまちかな。

参加者 e：一人で夜道を歩ける、犯罪がないまち。

参加者 f：ジャッジされないまち。属性で判断されない、誰か一人の主観だけで良い悪いを判断されない。受け入れられているというか。

参加者 g：まちで一番安心できるところは駄菓子屋さんです。子どもが泣いているときに、ちょっと飴をくれたり、何かと声をかけてくれて。なにかあったら頼れる安心感があります。わたしにとって映画って精神的な意味での避難場所のイメージもあるので、まちに映画館があることで、「そこにいれば守ってもらえる」という感じになると、住んでいても安心じゃないかなぁ。

宮島：シアタードーナツのある沖縄市コザは、みなさんの言っていることがほとんど当てはまる（笑）。沖縄はチャンプルー文化といって、なんでもまぜこぜにする文化。僕が映画館をやるっていったときにも応援してくれる人がたくさんいたし、外国から移り住んで商売してる人たちもいるので、何か新しいことをやろうといったときに助け合いができるまちです。あと個人的には、沖縄において安心という話で基地問題は切り離せないと思います。

コメントする参加者

石井：ちょっと質問を変えて。自分が生まれ育ったまちや、今の住まいの近くに映画館がありますか？

参加者 c：地元が福島県の南相馬市で、朝日座という映画館がありました。今も建物は残っていて、たまにイベントをやっているようです。わたしが子どもの頃は 2 つ映画館があって、アニメ祭りとかやっていました。今住んでいるまちには映画館がなくて、映画を観に行こうと思ったらけっこう大変なので、上映会や映画祭がもっと近場であるといいな。

参加者 e：自宅から徒歩 10 分ぐらいのところにシネコンがあります。夜遅くまでやっているので、仕事が終わってからでも観に行けるのがいいです。

参加者 b：：子どもの頃は映画館まで遠くて、あまり行きませんでした。今はシネコンから徒歩 3 分のところに住んでいて、人生で一番映画館が近づいた（笑）。家族でも行くようになって、今が一番生活の中に映画館が組み込まれているかな。

宮島：シアタードーナツがあるのは、沖縄本島の真ん中あたり。実は沖縄県で最北端の映画館です。そこから北には一軒もない。昔は名護ややんばるにもあったんですけどね。沖縄でも映画館で観る人は減ってきているけれど、実はスクリーン数は増えていて。沖縄市の自宅から車で 30 分で行ける映画館は、スクリーン数でいうと 25 ぐらいある。ただ最北端がここだっていうのはちょっと悲しいね。北部の人たちが映画や文化的なものにふれるまでに 1 時間以上かかるという現状があります。

石井：沖縄の映画館の事情を伺えるのは貴重です。

小さな理想の世界

石井：ここから本題。「こんな映画館があったらいいな、こんな映画館があったらまちがこう変わるんじゃないかな」と、みんなで夢を描いていきたい。まずは平塚さん、チュプキも夢の扉を開いた場所ですよね？

平塚：やっぱりどんな人も、ありのままの個性が生き生きとしている姿が見られるまちがいい。隣近所に住んでいるいろんな人が、その人らしく存在できて、受け入れられているというまち。映画館づくりにもそれは表れていて。チュプキという名前はアイヌ語で「自然の光」という意味で、ここはありのままの自分に帰れる場所というイメージで作っています。

でも、まだまだこぼれている人がいるなとも思っていて。ちょうど今、鑑賞料金の割引についてスタッフと話し合っているところです。当館では障害者割引を設けていないんです。音声ガイドや字幕、車椅子スペース、親子鑑賞室があるということで、「当館は“障害者”のいない映画館を目指しておりまして、障害者割引という制度は設けていません」という説明をしています。ただ、ツールや設備で拭える障害はあっても、経済負担という障害は拭えないんですよね。そこで、「『プアエイド割引』というものを設けているから、経済負担が苦しい方はこちらもありますが、どうなさいますか」と聞いていた。でも、「『プアエイドで』と言うと、まるで『わたしは貧困です』と言っているみたいで、どうにかならないか」というお声があって。それに考えてみたら障害の有無に限らず、いろんな理由で経済負担が苦しい人はいらっしゃる。そこで、運用や「プア」という言葉を見直しているところです。他には、若い人たちにもっと映画観てほしいというところから、今後の映画館の未来を考えたい。たとえばドネーション方式で、寄付していただいたお金を使って、「映画を観たいけれど負担がきつい」という若い人たちを支える、とか。

わたしは今の社会によって生まれている“障害”や“生きづらさ”をこの映画館ではなくしたいんですよね。「こんな世界に生きていたい」という理想を映画館という小宇宙で表現していけたらといいなと思っていて。その影響がまちにもじわじわと広がっていくといいなと。実際、ここは障害をお持ちの方がよく訪れるまちになったので、周りのお店の方も、通りすがりのまちの方も、いろんな人たちが訪れるのが当たり前になっていったり、どういうアプローチをしたら手助けできるのかも、自然とわかっていっているようです。チュプキはそういう感じですね。

みんなで未来をつくるドネーション

石井：平塚さんのお話を聞いて、奈良にあるチロル堂（ https://www.tyroldo.com/ ）という駄菓子屋さんを思い出しました。大人が買い物をした代金の中から子どもにチロる（ドネーションする）ことができる仕組みを作っていて、子どもたちの居場所になっているらしいです。僕が住んでる館山でもやってみたい。

宮島：ドネーションの話でいうと、シアタードーナツでは「U22 チケット」をドネーション方式でやっています。1 枚 700 円で購入していただいて、学生さんが映画を観るのに使える。コロナ禍で始めたんですが、今は利用者が 800 枚を超えました。最初は「学生応援チケット」という名称だったんですけど、友人から「学生じゃない若い子や、学校に行きたくても行けない、学生証がない 10 代の子もいるよ」と言われて、すぐに「U-22」に変えました。チケットには購入した人の名前が書いてあって、「この人からあなたへのプレゼントですよ」と。使った人には感想文を書

いてもらって、劇場のロビーに貼り出しています。全部ファイルしてロビーで見られるようにもして。

参加者 d：割引の話では、最近「夫婦割引」から「ペア割引」に変わる動きが出ているのがうれしいです。性自認や性的指向に関わらず「ペア割」。

こぼれている人たちのニーズ

平塚：個人の方の鑑賞サポートをされている蒔苗さんのお話も聞きたいです。

蒔苗：わたしは字幕と音声ガイドの制作とアプリを提供している会社で、字幕や音声ガイドを必要としている方の相談窓口を担当しています。日々みなさんの声を聞いていると、そもそもサポートがあるということの情報が届いていないという課題への気づきがまずあります。

それから、“こぼれる人”ということでは、難聴の方から、「ヒアリングループ（マイクを通した音声を直接補聴器や人工内耳へ伝えることができ，講演やコンサートなどの会場で，発言者の声や音楽をクリアに聞くことができる設備）が設置されているかどうかの問い合わせをしてもらえませんか」というご相談をいただいたことがあります。その公演の問い合わせ窓口が電話しかないからなんですよね。問い合わせても結局「ないです」という対応だったりするのですが、それでも確認できてよかったとおっしゃる。「今までだったら諦めてしまっていたところを、とにかく問い合わせをしてもらえたことが救いだ」と。一方、視覚障害の方なら、申し込みがフォームだけだと困難な場合があります。手段が用意されていないということはつまり、「電話が使えない人が問い合わせをしてくるわけがない」と思っているからですよね。それによってお客さんの側は、「わたしたちは文化芸術からお客さんとみなされていない」と思わされてしまう。できるできない以前に、そもそも想定がないためにギャップを生んでいる現状があります。もちろん事業者側は悪気があってやっているわけではない。ただ、社会的にそれが必要だと知られていない。そこが課題です。

あと、みなさんの話を聞いていて思ったのは、すべての人が一緒に楽しめる場というのは必要で、それを模索することは絶対必要なのだけど、それとは別に、その作品を静かな環境でストイックに観たいという人もいるだろうから、それらを選べる環境が必要なんじゃないかということです。たとえば「リラックスパフォーマンス公演」という、通常の劇場空間での鑑賞やマナーに不安がある方のための公演形態があるんですが、入退場自由なので、たとえば知的障害や発達障害の方、子どももどんどん来てねというふうにしています。それならわたしも行けると思っていただけるといい。一方で、その環境だと気が散る人もいるだろうなと正直考えていて。だから選べることも大事かなと。

舟之川：蒔苗さんのお話から、先日読んだ記事を思い出しました。「トゥレット症と戦う人のささやかな願い　映画館に行ってみたいが実現した日」というタイトルで。トゥレット症候群というのは、チック症のもっと重い症状で、体が勝手に大きく動いてしまったり、大きな声が出てしまったり、その中には暴言もあったりするような精神疾患だそうですが、それを抱える人たちだけの上映会が名古屋の映画館（名演小劇場のこと。2023 年 11 月閉館）で行われたという内容でした。それでわたしが思ったのが、普段ユニバーサル上映を謳っていない映画館でも、特別興行として枠を取ればこういう場が作れるのか、ということでした。もちろんそれをするためには、劇場側にも余白が必要で。そういえばチュプキって定休日があるんですよね。実際は休んではいなくて、特別興行やシアターレンタル（劇場の設備を有料で貸し出すサービス）に使っているんですが。だから常設の映画館であっても、全体の流れの中にいつも余白を設けることによって、できることもあるのかなと思いました。このチュプキサロンもそういう余白を使って行われています。

あと思い出したのが、このサロンの第 2 回で平塚さんがお話された、難病の方とのエピソード。ずっと席に座っていられないんだけれども、どうしても映画が観たいという方に、チュプキの 2 階で横になったり、好きな体勢で観ていただいたという話です。いろんなニーズがあるから、すべてに対して最初から用意するのは無理だけど、お客さんの中で割合が大きいものやニーズが明確なものについては予め設定しておいて、それで対応できないことが出てきた場合には、話を聞いて、どうしたら観られるかを一緒に考える、作って

いこうとする姿勢がやっぱり大事なんだと思いました。“分ける”か“混ぜる”かの話は、学校でもインクルーシブ教育の文脈で出てきますが、いつも全員混ぜなきゃいけないのでも、「分けとけばいい」のでもない。ケースバイケースかもしれない。行ったり来たり、迷いながらやっていくことなのかなと思います。

平塚：シアタードーナツさんはシアターレンタルも積極的にやってらっしゃいますよね。

宮島：はい。夜の時間をいろいろ工夫していて。19時の回はお客さんが全然来なかったんで、3年目からは通常の上映をごっそりなくして、貸切上映やイベント上映に切り替えました。そうやって来てもらえる機会を多く作っています。やっぱり来てもらわないと、映画館での過ごし方ってわからないですよね。

石井：僕はお酒飲めないからわからないんですけど、飲みながら映画を観られたら、うれしい人もいる？

平塚：それがシアターレンタルのフレキシブルなところで。借りた人たちが、お酒を飲みながら観るとか、さっきのトゥレット症の方たちもそうだけれど、通常の興行で混ざるのが難しい人たちが集まって観るのにも活用できる。借りる人たちのアイディアでいろいろ企画して使ってもらえる良さがありますよね。

吉川：わたし、まさにインドビールを飲みながらインド映画を観るのに、チュプキのシアターレンタルを使わせてもらいました！

チュプキサロン運営の吉川（左）と平塚（右）

映画館のマナー

石井：今日サロンが始まる前にチュプキで『BLUE GIANT』を観ていて思ったのが……、他のお客さんとイエーイ！って言いたい！　拍手したい！

吉川：『BLUE GIANT』の公式から「拍手歓迎のお知らせ」って出ていましたよね。（ https://bluegiant-movie.jp/hakusyu.html ）チュプキではどう対応されてるんですか。

柴田：シネマ・チュプキのスタッフの柴田です。拍手は自然に出ちゃうものだから、そういう衝動や感情を映画館のほうから規制してしまうのはちょっと気持ちが悪いんじゃないか……ということで、うちは特に何も言わず、出ちゃうならどうぞと。

平塚：拍手も笑いも涙も同じようなものかなぁって。それが人に許可されたらできるけど、許可されなかったらできないって、なんて生きづらい世界だろうと思って。拍手って誰かがやったら、便乗してわーっとなる。その瞬間に立ち会えるか立ち会えないかは運という面白さもあるし。でもうちは拍手が起こりやすいですね。あ、これチュプキ自慢です（笑）。わりと見えない人たちが自然と率先してやってくれるってところがある。だから石井さんもやってよかったんだよ～。ただ、映画ってマナーの話が上映前に出るから、やっぱり静かに観る場所にはなっちゃってますよね。

参加者 b：映画館でのマナー喚起に関しては、僕も思うところがあります。同じ場面で拍手や笑い声が起こるなら、それは楽しい体験だし、映画館で観る醍醐味だと思うんですが、小さい子が走り回るとか、近くの人がしゃべっているとか、ネガティブなことも当然起こる。「それも込みでの映画体験なのだ」という意識をみんなが持てるかどうかかなと。でも今の映画館は「静かに観るのがマナーだ」と言われてしまっている場所なので、ノイズが起きると絶対に悪いものだというふうになってしまう。「マナー」に引っ張られすぎる風潮には、やや疑問があります。逆にUDキャストをセットをするために、場内でスマホを操作している方もいることは、ちゃんと周知したほうがいいのではないかと思います。

蒔苗：UDキャストは2016年から劇場で提供しています。これは映画業界と一緒に始めたことなので、注

意喚起も一緒にやっています。「UD キャストを使っているお客さまがいます」というメッセージも載せているんですが、その案内を省いているシネコンさんもおそらくあるかと思います。SNS で「上映中にスマホを使っている人がいる」という投稿や、それに対して、「UD キャストを使う人もいるんだ」というやり取りがしばしばあるんですが、ありがたい反面、こちらとしても発信が必要だなと思っています。「UD キャストはちゃんと画面は暗くなる（輝度が下がる）んですよ。このぐらいの暗さですよ」とか。

あとは、いまだに日本映画の字幕付き上映の機会が少ない状況はやっぱり変えなきゃと思っています。来年度からは合理的配慮の義務化もあるので、この機会に次のフェーズにいきたいですね。字幕付き上映回は、聞こえる人が遠慮して入館者数が減ってしまうというような、わたしたちにしてみると、えっと驚くようなことがあるようです。「みんな来ていいんだよ」という映画館側からの働きかけでの意識の転換も必要だなと思っています。

石井：思いつきですけど、テスト勉強をするときに、参考書に赤い下敷きを入れると赤い字が見えなくなる、みたいなのありましたよね。メガネをかけると字幕が見えなくなるとかにしたら、全部の映画に字幕はついているけれど、字幕が見たくない人はかけるとか、ありかもしれない。

ミニシアターは公民館

平塚：最後に、ミニシアターにはどんな機能があると思いますか？

参加者 b：人が集まって、コミュニティが生まれるということかな。今日このトークイベントをしているのもそうですし。最近本屋さんで、音楽ライブや詩の朗読会をやっているところがあります。いろんな人が集まって、ちょっと飲食が出たりすると、やっぱり独自の文化が生まれてくる。映画館というこれだけの空間があるということが、まちにとっての財産だと思いますね。

舟之川：ミニシアターは上映してきたすべての映画の歴史が降り積もっている場所ではないかな。場所と映画体験の記憶が強く結びついていて、「この映画はあそこの映画館で観たな」と鮮やかに思い出せる。その記憶は人の数だけあって、みんなで一つの体験を分かち持っている感じがする。

宮島：最近一つの結論に達したんですよ。シアタードーナツは公民館になるんだなって。いろんなジャンル、テーマ、メッセージの映画を扱うことで、いろんなコミュニティの人たちが来て、交流やつながりが生まれる。たまたまうちの前にバス停があって、僕が番頭さんみたいに入口のところにデスクを置いてるから、両替してとか、道教えてとか、トイレ貸してとかいろんな人が来る（笑）。でもそうやって話しやすいムードを作っておけば、“ノイズ”を許せるムードも広がるかもしれない。みんなのそれぞれの映画館の楽しみ方も、自然と広がっていくといいよね。

平塚：今日は映画館の役割や使命をあらためて感じさせてもらえる集いでしたね。

石井：宮島さんの「ミニシアターは公民館」がすごくしっくりきました。またこのテーマで話したいですね。みなさん、ありがとうございました！

（終）

（構成・文：舟之川聖子）

終了後、シアタードーナツの宮島さんと話す参加者